

随 想

14歳の子どもの こころがみえますか？

医療福祉学部福祉貢献学科教授

須永進



先日、数十年前に起きた連続児童殺傷事件について、当時14歳であった少年の犯行動機やこころの動きを知りたくて、その加害者とされる少年の父母の手記と少年に関係する資料に目を通して、ふと同じくらいの年齢の子どもが登場する小説を思い出しました。

その一つが三島由紀夫氏の「午後の曳航」（1963年）という小説です。もちろん、事実と小説は異なるため比較はできませんが、14歳になろうとしている主人公の登（のぼる）が母親の相手である船乗りの男を仲間と一緒に殺害しようとする話で、その犯行の根

底に「大人や社会への反抗」という気持ちを感じられる一方、仲間集団以外にはこころを開かず、自己中心的な行動をとりがちなの年齢の子どもが存在を強く感じます。

もう一つの作品は、灰谷健次郎氏の「少女の器」（1985年）です。これは思春期を迎えた少女の話で、この時期みられる難しい親子関係や家族関係のなかで、懸命に自分を見失わないように生きている14歳の感性豊かな緋（かすり）のこころの機微が、鮮やかに描かれています。

この二つの作品の主人公に限ってみると、14歳の子どものこころは自己と他

者との間を彷徨いながら、時に自己中心的な鋭い感覚で家族や世の中に対して反社会的発言や行動をとることが少なくないことに気付きます。もう一度、この作品のストーリーラインとは別に、主人公の登と緋の多様なこころの動きに目を向けて読み返してみる価値はありそうです。

「14歳の子どものこころがみえますか」と、問題を投げかけてはみたものの、それをわが身に置き換えると、娘の14歳の時を思い起こすことができな私には、何も言う資格がないようにも思えますが。